



千代田区 ◎ 皇居東御苑

そく日比谷入江の埋めたてに着手。入江を利用して外濠を開削、神田台地を切り崩して日比谷入江を埋めたてていった。当時のこうした地形から、汐見坂は、日の前の江戸湾につながる海の、潮の満ち干が眺められたことから名づけられた。

東御苑にはもう一本、本丸と二の丸を結ぶ坂があり、こちらは梅林坂と呼ばれている。坂を上っていくと右手にカーブし、坂の両側に梅の木が植えられている。文明十年（一四七八）、太田道灌（一四三三～八六年）が武州入間郡川越御吉野の天神社を勧請し、数百株もの梅を植えたことから命名された。現在、約五十本の梅が坂に沿って植えられている。太田道灌は、長禄元年（一四五七）に江戸城を構築。主君である扇谷家の上杉定正（一四四三～九四年）によって謀殺されてから百年後、家康は江戸に入ったが、そのころの江戸城は道灌が構築したままの、質素な城であったという。



左手に白鳥濠を見ながら登る汐見坂

▼目の前に迫っていた日比谷入江
大手門から皇居東御苑に入り、二の丸庭園を右手に見ながら奥に進むと、正面左手に向かって下る坂がある。江戸城本丸と二の丸をつなぐ坂道で、汐見坂という。豊臣秀吉が天下を統一したのち、関八州を与えられた徳川家康が、江戸に入つたのが天正十八年（一五九〇）のことだった。そのころ、江戸には本郷台地から半島のように突き出た、江戸前島と呼ばれた台地があり、その南端が現在の新橋付近にあたつていた。

江戸前島に囲まれるように日比谷入江が、現在の皇居の目の前まで迫り、そこに平川（神田川の原型といわれる）と、小石川が合流して流れこんでいた。日比谷入江の幅は約四百メートル、長さが約三キロ以上もあった。慶長八年（一六〇三）、征夷大将軍に任じられた家康は、江戸に入ると、さつ

皇居東御苑

汐見坂、梅林坂